教職あらかると

教員研修はどのように進めるべきか

後藤　忠

私は、教員研修は「守破離」の道理をもって進めるべきだと考えている。

まず「守」、つまり基礎基本の習得から始めることが大切だと考えている。

歌舞伎界の名優坂東玉三郎の逸話は既に紹介したので重複は避けるが、芸術、技術、学問、教育などのあらゆる分野の発展と充実は、また、人材育成は古来、この道理をもって行われてきた。それは日本に限った話ではない。美術界の巨匠パブロ・ピカソも若いころは徹底的にデッサンに明け暮れたという。その守から確かな「破」が生じ、やがて究極の「離」に至るという道理である。

基礎基本の習得を目指す指導は、可能性にあふれた瑞々しい若い芽を摘むことでも、潰すことでもない。若い芽が健康な芽として、健やかに、たくましく育つためにどうしても必要な指導なのだ。

道徳教育の研修も同様である。道徳教育とは何か、道徳科授業の特質やその役割は何か、道徳授業が目指すものは何かなどを正しく理解・習得した上で、それらに適った指導法の工夫・改善に取り組むのが筋道というものである。

また、他のあらゆる分野と同様に、道徳授業においても先人の長きにわたる不断の授業実践があり、そこからつかんだ指導技術（指導法）の極みともいうべきものがある。それらは意外にシンプルで分かりやすく、しかも、実に鋭く、奥深い。

これらはいわゆる「文化」と言うべきものであろう。人間の地道な努力によって形成されてきたこうした文化は、尊重されなければならない。

ところが、

最近、ある月刊誌にある著名な方が書かれていた記事を読み、我が目を疑った。そこには「道徳授業の新しい芽を育てる風土を」と題して、次のように記されていた。誤解を生むといけないので丸ゴチックで記述してある通りに転載する。

新しいものは常に「未熟」である。しかし、未熟であるからこそ「魅力」に満ちている。そして、「未熟」なものはその可能性を秘めて成熟し、新たな息吹を生み出していく。しかし、まだ小さな「タケノコ」のうちに、「これは〇〇らしくない」などとして抜きとってしまったとしたら、それこそ、しなやかで雄壮な「竹」は育ちようがない。荒削りであっても、まずは見守りはぐくむ姿勢に立ってこそ、新たな魅力が発掘される。

その方は「道徳授業研究の世界」にも「似たような状況があるのではないだろうか」と指摘し、次のように述べている。

例えば、若い教師の荒削りな授業に対してあるべき枠組みを示し、「若い先生は、まず基礎基本を踏み外さないことが大切」などと伝えて、その芽の剪定にかかる。経験の豊富な教師の使う道徳用語を駆使して、それから外れる在り方を一刀両断にしがちな場面をよく見る。もちろん、長い間に培われた授業のよさは引き継がれるべきだが、きまりごとや禁じ手が張り巡らされた狭い箱庭の中では、斬新な授業は育ちにくい。

さらに、その方の指摘は①若手教師に授業での冒険をさせない問題、②他の指導を否定し合う雰囲気の問題、③授業観や指導者（注）いわゆる研究会の主宰者）ごとに立ち上がる一面的な研究会の問題に及んでいく。

そこに至っては、もはや断片的で偏った現状把握、現状理解と言わざるを得ず、コメントをするに値しないので止める。

したがって今、自戒を含めて

私が最も言いたいことは、研修会や研究会等で指導・助言に当たる者は人にこうした誤解を与えてはならない、また人からこうした誤解を受けてもならないということである。このことに十分留意してかからねばならないということである。

人を教え、人を導く者（校長、教師も同じであるが）の魅力の大部分は、その人の知識や識見の豊富さにはない、その人の人間性、つまり人間的魅力にある。

その人との議論に負けて、その人の指導に屈服して、人は改心などしない。傷心が残るだけである。

人が心から「向上しよう」と思うのは、指導者の温かい人間性に触れ、それに感化され、啓発された時である。このシンプルな道理を常に自覚・自戒して教員研修や人材育成、人間教育に当たりたいものである。